
拡張へボン式の提唱

上西俊雄

プログラム開発の原則に頻度の高い箇所の効率化を第一にせよというのがある。通常の業務でパソコンを使用する際、もっとも頻用されるソフトは仮名漢字変換システムであろう。仮名漢字変換方式にはいろいろあるが、いわゆる QWERTY 式のキーボード¹の場合はローマ字入力である。仮名入力の人もあるが、ワープロ専用機時代のことで、パソコンであれば、コマンド入力のためにアルファベットのキーをおぼえる方が有利ということもあって圧倒的にローマ字入力である。

また、パソコンの世界では ASCII 以外通用しないレベルがある。BIOS²の設定とか、Windows の終了が失敗したときのディスクチェックとかはメッセージが字化けて役に立たないことが多い。こういう箇所日本語を用いるにはローマ字しかない。プログラマーに英語力が要請される理由の一つはアルファベットのメッセージを読み取れるかどうかということがある。実際は、英語力というよりアルファベットという表記体系への習熟度の問題である。

さらにデータ処理上、ASCII³にマッピングすることがある。ISO3602 は表記体系の変換を目的とした一連の規格の一つで、仮名と ASCII との対応関係⁴の国際規格である。

また、英語や、その他のアルファベットを用いる言語で日本の地名や人名あるいは組織の名を表さなければならない機会も増えている。最近では耳で覚えた日本語を自己流のローマ字で書いてくる外国人もある。

一方おびただしい外来語の流入のため、カタカナ表記は五十音図を事実上拡張しているが、ローマ字はジズズジの四仮名について中和している立場から、欠損五十音図が前提⁵である。仮名で書き分けられる音がラテン文字では書き分けられない。かくしてローマ字すなわちラテン文字の表音性はわかりにくいものになっている。これはわが国における英語教育の効率の悪さ⁶と無関係ではない。

以上列挙したようにローマ字問題はきわめて今日の問題である。拡張へボン式を提案する所以である。

¹もっとも普通のキーボード。上段左からならんだ 6ヶのキーが QWERTY である。

²basic input output system のこと。

³American Standard code for information interchange の頭字語。ここでは 1 バイトの英数字ということ。

⁴この場合はリテラルすなわちアルファベットそのものを表す場合の方法を定めておく必要がある。たとえば逆アポストロフ(‘)で囲んだ部分は仮名に対応せずそのままとするのである。

⁵『教育新聞』平成 14 年 9 月 2 日所載「カタカナ語の問題」参照。

⁶これについては研究社『CURRENT ENGLISH』平成 13 年 7 月号 8 月号の「英語教育百家争鳴」で論じた。

現行の問題

かつて日本語の表記をローマ字に変えるべきだとの主張があり、日本式やヘボン式の争いがあった。昭和二十九年の内閣告示は二つを折衷した訓令式を掲げているが、元の方式も併記し、さらに昭和十二年のときと同様、添え書きを付して特殊音の表記は自由とした。この添え書きは規格の杜撰さをあきらかにするために意図的に加筆された、いわばトロイの木馬だったのではないかと思われる。たとえばティを ti と定めるとチの ti と抵触するが、これも自由ということになる。特殊音を考慮すると最初から基準としての条件を満たしていなかったのである。学術用語集ではさすがに抵触を避けてティを t*i*、ディを d*i* のようにしたが、この表記法はどこにも継承されなかった。仮名漢字変換で事実上の標準となっているのはティを thi、ディを dhi とする方法であるが、これは h を一種の補助記号とする用法であって、ti、di と少し異なる音を表すという意味では理屈は通る。ただしそもそも t、d の音価如何という点で破綻する。

さて訓令式は国会図書館が検索キーとして用いる場合や、JIS Z8301 で英文の企画書の表題に日本語を用いるときに遵守すべきものとされており、また ISO3602 にも採用された。ただ ISO のものは ASCII との対応関係が原則なので訓令式では長音符一つとっても趣旨にあわない。早晚改訂が必要になると思われる。

一方、海外の日本の書籍のカタログはヘボン式であるのをはじめ、国鉄時代から駅名の表示はヘボン式であったし、国土交通省の道路標識もヘボン式である。また海上保安庁では海図等水路図誌及び航空図誌のローマ字のつづり方を平成 11 年 7 月 2 日にヘボン式に切替えている。外務省は旅券はヘボン式としており、平成 12 年 4 月 1 日以降はオ段に限って長音に h を用いる方式を認めている。オ段に限ったのは人名の場合はオ段だけでほとんど足りるとしたためであろう。しかしオ段以外のたとえば飯田という名前を ihda としても不都合はないはずであり、むしろ大原が ohhara でいいのかどうか問題。オッハラという名前はまあないだろうが、転写法としては破綻している。

仮名漢字変換のための日本工業規格 JIS X4063 は内閣告示に従うことと、学術用語集のローマ字表記を尊重するという原則でできていて、ヘボン式にも訓令式にも対応する。現在の変換システムは仮名入力を前提としたアルゴリズム⁷なので、アルファベットの組み合わせにいろいろあっても、仮名に変換する段階で違いが吸収されるため、方式について厳密に考える必要がない。変換システムごとにローマ字の方式が異なるのに嫌気がさして、仮名入力に

⁷ローマ字の方式を仮名と一対一に対応するように定めると、ASCII を検索キーとする仮名漢字変換システムが可能で、モード切替えは過去のものとなる。片仮名か平仮名かは、コントロールキーで指定して決めることになろう。スペースバーはそのまま確定すれば 1 バイトの空白の入力となり、シフトキーを押したままでたたくと文節の切れ目として処理されるようにするのが効率的であろう。

戻った人もある。

以上、ローマ字の方式が一定でない状況を述べた。国語の教科書は訓令式で英語の教科書はヘボン式というふうに別れているし、同じ地名がバスと鉄道と異なることも珍しくない。たとえば吉祥寺は鉄道では kichijoji で、バスでは kitijoji である。バスは長音のマクロンを割愛した上に、吉祥寺のチは訓令式の方が短いため、ヘボン式に混ぜているわけである。長音についても杏林大学病院を Kyorin Daigaku Byouin とするなど実にさまざまである。

ローマ字による表示を掲げる以上、名前の同定にはもっとこだわってほしい。外国人には異なるつづりは別の音、別な地名と映るであろうし、地名、人名の同定はいわゆるセキュリティの点からも看過できない問題ではあるまいか。

しかし、現在の混乱は、そもそも日本式やヘボン式が構想されたときとは、日本語をめぐる状況が変わってしまい、従来の五十音ではまかなえなくなっていることにある。日本式のように五十音の行と段にアルファベットを充てるだけでは足りないのである。チとティもあるので、タ行であれば、子音は t と一義的にいえなくなった。日本式や訓令式は対応できない。

ではヘボン式はどうか。ヘボン式は子音を英語式に用いるもので、同じタ行でもイ段は ch、ウ段は ts と切替える。そこでティには ti、トゥには tu を充てることができる。同じひそみで、ディは di、ドゥは du となろう。ただしジヂズツの書き分けには対応していない。ヘボン式の促音は ch の前は t であるが、対応する濁音の場合の規定を欠く。また、バッハのようにハ行に先立つ促音も考えていなかったに違いない。さらに方言を考慮すればナ行やマ行に先立つ撥音を認めるべきかもしれない。

仮名漢字変換で撥音を nm で表すという規定がある。女は onna とするわけであるが、n を重ねても次に母音があればナ行のように発音するのがアルファベットの常道⁸である。ヘボン式にはなじまない。

ヘボン式の拡張

我々の考えるローマ字は翻字が基本である。ジヂあるいはズツの書き分けができなくてはならない。ヘボンが初めジに dzu を充てていた。ツツは tsu dsu できれいに対応している。シジはどうか。シが shi であればジは zhi であろう。ジとヂの音に違いがないとして両方に ji を充てているのをジに限定するわけである。チが chi で、ヂが ji になる。ch は [tʃ] であるので、促音のとき ch の前が t である理由が判る。後続の子音を繰返しているわけである。j は [dʒ] であるので j の前では d としなければならぬ。jj⁹では同じ子音を繰

⁸ 「好なおなご」を sunna onago とするのは苦しい。

⁹ ドッジボールを dojjibōru と立項している和英辞典がある。

り返すことにならない。

ついでながら、促音は t と規定する。そうすると語末の場合を覆うことができる。語中の場合は後続の子音と同じ音の文字に変えるわけである。但し後続の子音が h の場合は問題。促音は閉鎖音か、摩擦音の前にしか現れない。h は通常摩擦音ではない。これがハ行でウ段を f で表す理由である。エッフェル塔のようにファ行であれば efferu でよい。しかし h が促音の後に現れるときは例外的に口蓋摩擦音であり、それを明示するには促音を口蓋閉鎖音の k で表すのが適当であろう。したがってバッハは bakha とする。

翻字であれば長音でなく長音符の転写ということになるが、これはどうか。アクセント記号(˘)や、マクロン(ˉ)を母音字に載せて表す方法は内部表現形式¹⁰になじまない。では何を充てるか。ハイフンを充てる方法もあるが、ハイフンそれ自体が必要なこともある。またアルファベット以外の記号を用いると綴りの流れが断たれてしまう。アルファベットの中でそういう役割を担う文字は h である。実際、この文字を長音を表すのに使う人は多い。すると、促音、撥音、長音符は次のように規定できる。

促音は t で表す。語中の場合は t を後続の子音と同じものに変える。但し後続の子音が ch の場合は t、j の場合は d、h の場合は k に変える。後続するものが半母音 (w, y)、鼻音 (n, m) の場合は t のままとし、アポストロフィーで切る。

撥音は n で表す。但し両唇音つまり、p、b、m の前では n を m に変える。長音符は h で表す。撥音の n、長音符の h の直後が母音、半母音 (w, y)、h であればアポストロフィーで切る。

撥音の n や長音符の h の直後が h の場合はアポストロフィーで切らずとも不都合はないのであるが、規定の一貫性から h を含めた。またラテンアルファベットの用法からすれば h は一種の補助記号としての性格が強く nh という並びは ñ と同一視されやすいということも考慮したためである。

さて w や y はそれぞれワ行ヤ行の子音であるが、拗音のときにも用いる。w は合拗音でクワは kwa、グワは gwa とする。但しハ行合拗音というべきホワ、ホエのような場合は hw とせず wh としたい。つまりホワ、ホエは wha、whe とするのである。英和辞典でたとえば when を引くと発音記号は [hwen] となっていて、wh の並びが綴りでは逆転していることが判る。この場合の h は呼気を表しているのであるが、通常 h が二字の組合わせに用いられるのは ch、sh、th のように補助記号として後に位置するため、hw では不自然に感じられるためであろう。wh の方が「子音が英語式」というヘボンの方式に適いもし、また長音符の h とまぎれるような並びを排除する利点もある。

もっとも英語式に適うかどうかをいえばカ行の合拗音では k でなく q を用いるべきではないかという考えもありうるが筆者はこの考えをとらない。第

¹⁰厳密には文字コードの格納形式。ローマ字入力でキーを叩いたときに生成されるストロークコード。小文字かどうかで切替わる。我が国のパソコンの ¥ と米国のパソコンの \ は同一である。

一にカ行の子音を k 一つにできればそれにこしたことはなく、へボンも k で通して、先人の方法に異を唱えるにはよほどの理由がなければならぬと考えるからであるが、もう一つには q を用いれば当然の事ながら両唇半母音の w の異体字としての u を導入しなければ完結しない、つまりクワ、クェ、クオは qua、que、quo としないわけにはいかない。しかし対応するガ行の場合は異体字 u の用法は q の場合ほど顕著でない。

さてへボン式で子音字が、たとえばシ (shi) のように切替えてある箇所はスイ (si) を補うことも、また shi からシャ行 (sha, shi, shu, she, sho) を構想することも、ヤ行のエ段のように空欄をイエ (ye) として埋めることも出来る。またファ行 (fa, fi, fu, fe, fo) やヴァ行 (va, vi, vu, ve, vo) も可能である。さらにテュ、デュ、スュ、ズユなどはウ段だけの孤立したもので、日本語としてはそれだけ苦しいものであろうが、ローマ字は tyu, dyu, syu, zyu と至って簡単である。こうしてできた拡張五十音図は音節単位でユニークなアルファベットを充てたものになる。つまり、ティやテュをテとイヤユの組み合わせで考える必要のないローマ字が工夫できる。

このローマ字方式はへボン式を拡張五十音図に及ぼしたもので、拡張へボン式と呼ぶのが適当であろう。拡張へボン式は双方向に変換可能である。

なお内部表現形式では大文字小文字は別である。キ、エ、ヲとウィ、ウェ、ウォとは wi, we, wo と Wi, We, Wo とで区別する。これを現在の形式にするには、はじめに wi, we, wo を i, e, o とし、次いで Wi, We, Wo を wi, we, wo とする。するとキエヲはイエオと同じ扱いになる。またヂジ、ヅズを区別しない場合は zh は j, dzu は zu にする。そうすると長音符以外は現行のへボン式と同一になる。

翻字であれば、当然 oo のような母音の並びも出現する。欧米であれば母音の並びを別々に発音する場合は分音符を付けて coöperation や naïve のようにすることもあるくらいなので、駅名の表示など外部表現形式としては適当でないという考えもありうる。その場合は、長音のための母音連続にかえて長音符のための h を伴う形式を採用してもよい。但しこれは機械的な変換では済まない。長音符の h とアクセント符付き文字とは相互に変換可能である。

冒頭 ISO3602 に触れてリテラルのことを注記したが、双方向変換で片仮名平仮名の区別が必要な場合はたとえば q で囲むと片仮名とする方法がある。

次ページの表は以上の結果を三省堂「必携用字用語辞典第四版」の外来語の表記にあるカナの表に適応したものである。

ローマ字表

ア	イ	ウ	エ	オ					
a	i	u	e	o					
カ	キ	ク	ケ	コ	キヤ	キユ	キヨ		
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo		
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギヤ	ギユ	ギヨ		
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo		
サ	シ	ス	セ	ソ	シャ	シュ	ショ		
sa	shi	su	se	so	sha	shu	sho		
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジャ	ジュ	ジョ		
za	zhi	zu	ze	zo	zha	zhu	zho		
タ	チ	ツ	テ	ト	チャ	チュ	チョ		
ta	chi	tsu	te	to	cha	chu	cho		
ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	ヂヤ	ヂユ	ヂヨ		
da	ji	dzu	de	do	ja	ju	jo		
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ニヤ	ニユ	ニヨ		
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo		
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヒヤ	ヒユ	ヒヨ		
ha	hi	fu	he	ho	hya	hyu	hyo		
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビヤ	ビユ	ビヨ		
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo		
パ	ピ	プ	ペ	ポ	ピヤ	ピユ	ピヨ		
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo		
マ	ミ	ム	メ	モ					
ma	mi	mu	me	mo					
ヤ		ユ		ヨ					
ya		yu		yo					
ラ	リ	ル	レ	ロ	リヤ	リュ	リヨ		
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo		
ワ	ヰ		エ	ヲ					
wa	wi		we	wo					
			シェ				イエ		
			she				ye		
			チェ			ウイ	ウエ	ウオ	
			che			Wi	We	Wo	
ツア			ツエ	ツオ	クア	クイ	クエ	クオ	
tsa			tse	tso	kwa	kwi	kwe	kwo	
ファ	フィ		フェ	フォ		ツイ			
fa	fi		fe	fo		tsi			
	テイ								
	ti								
			ジェ				トゥ		
			zhe				tu		
	デイ				グア				
	di				gwa				
		デュ					ドウ		
		dyu					du		
					ヴァ	ヴィ	ヴ	ヴェ	ヴォ
					va	vi	vu	ve	vo
							テユ		
							tyu		
							フユ		
							fyu		
							ヴユ		
							vyu		
ズイ	グイ	グエ	グオ	キエ	ニエ	ヒエ	フヨ	ヴヨ	
zi	gwi	gwe	gwo	kye	nye	hye	fyo	vyo	

付記 1:表記と読み

日本語の発音を伝えるということが目的であれば、ローマ字は相手の言語ごとに綴り変えるべきである。しかし固有名詞は同定が大事なので方式を定める必要がある。方式を定めるということは、発音が言語によって一定しないということを受け容れることでもある。

ヘボン式は子音は英語式であるが、母音が大陸式であるので、英語教育上マイナスであるという批判がある。英語の表記法は大陸式の母音も組み込んでいる。アルファベットの表記体系をそれとして身につけることは英語教育にとってマイナスであるはずがない。表記体系という考え方がないところに問題がある。仮名漢字変換のローマ字のなんでもありという状況は、英語教育で文字言語としてのそれと、音声言語としてのそれを別のものとしてとらえる考えと深いところでつながっていると思う。

とにかくローマ字教育は書き方だけでなく、読まれ方が変わりうることに注意しなければならなくなった。Jesus を現地語風にイエスと発音しろと英米人にいっても始まらない。

漢字の場合も同様である。固有名詞の表記と発音を視覚象徴と聴覚象徴とすると、言語を異にする場合、両方について同一性を保証することは難しい。日本国内で、ある韓国の人の名をいう場合、その漢字表記は日本風に読むしかない。我々は、日本語風の読みが視覚象徴を媒介にして機能するのであって、本来の聴覚象徴と異なることをわきまえている。かかる間接的な指示は失礼とはむしろ逆のものであろう。その本人に直接呼びかける場合で、その本人の言い方をわきまえている場合は漢字表記を離れて、原語での聴覚象徴を使うことができる。それが耳になじんだ結果、漢字表記と連合すれば、視覚象徴と聴覚象徴が一致する場合もありうるが、それはその特定の場合のことであって、漢字の一つ一つの読みを朝鮮語風にしたためではない。

付記 2:片仮名の用法

ローマ字は仮名をラテンアルファベットという別の表記体系へ変換する問題である。逆に、異種の表記体系から仮名への変換はどうか。ローマ字問題以上に方法の意識が薄いように思われる。いくつか例をあげる。

ヘボン式を拡張するとき、拡張五十音図とでもいべきものを前提していた。拡張部分は外国の地名人名のためが第一で、次に外国語の転写という順。その外国語が外来語となり、いわば、日本語に馴化していく過程で、拡張部分から、本来の五十音でまかなえるようになっていく、そういうものではないだろうか。

たとえば、violin はヴァイオリンかバイオリンかというとき、頻度を問題にするまでもなく、ひとたびバイオリンという形があらわれたからには、もう元に戻すことはありえないことではないかと。ところが最近ティームという表記をみかけることがある。また NHK の放送でも、語頭を歯茎破裂音で発音する。狂瀾を既倒に廻らす業と思う。

Linux をリナックスとする新聞が多い。リヌックスとしてほしい。そうすると二つの音節とも大陸式となる。英語読みならライナックスとなる。リナックスは一種の湯桶読みのように感じられる。開発者 Linus Torvalds 氏の発音がそう聞こえるということも聞くが、第二音節は多少の弱化を伴うはずであるし、英語の文脈ではなおさらそうなる。そのかぎりではリナックスとする根拠はあるわけであるが、英語の場合でも弱音をアと写すより、本来の音価にもとづく転写を心掛けるべきではないか。

パソコンのマニュアルでワーニングという語を見てすぐに warning とは判らなかつた。警告とするかうォーニングとしてもらいたい。暖かいはウォーム (warm) でワーム (worm) といえは芋虫の類である。a と o が逆に思われるかも知れないが、これは英語音韻史の問題で、a は両唇半母音の影響で円唇化した。quarter や quantity など同様である。但し quack のように後ろが軟口蓋音の場合は円唇化していない。一方 worm の場合は事情が異なる。よく考えてみれば love や some のように u のように発音する o は v、m、w のように minim(縦線) の多い文字に隣り合っていることに気づくはずである。この o は minim が重なるのを防ぐため u を書き換えたもので、u の異体字と言えよう。さて u の音価であるが、元来円唇母音でローマ字でウというのは御存知の通り。英語では円唇がとれて cut、tuck のようにアと発音することが多いが両唇音の後では put、bull などのように円唇が保持されている場合がある。w は両唇音であるが、p、b と異なり u (この場合は o) の円唇を保持する力は小さく、wonder や worm の u (o) は他の u と同様アのように発音されることになったからである。